

曲がり角にきた本牧ジャズ祭

渡辺光次

一 はじめに

昭和六十年八月。

本牧市民球場で「YOKOHAMA本牧ジャズ祭」が開かれた。これは市内の若者たちが「横浜の音楽状況を盛り上げよう」と毎年一回開いているもので、今年で五回目を迎えた。プロのつくるコンサートとはちがいで、ところどころに生かされたアマチュア感覚が人気の秘密にもなっている。

たとえば、会場規制がほとんどないこと。会場に集まった約二、〇〇〇人の観客たちは、太陽の下、寝ころがったり、本を読んだり、睡ったり、音楽もそっこのけで酒盛りをしたり：

：それぞれに彼らは、普段の生活で味わえない、のんびりとした休日を楽しめるのだ。

そして、ジャズあり、ロックあり、フュージョンあり……と多種多様の音楽が共演するのでも、本牧ジャズ祭ならではの特徴だ。

ジャズファンに限らず、多くの音楽ファンが楽しめるように、また、それまで自分が知らなかった音楽との出会いの場になるように、という理由からこうしたプログラムが第一回から組まれている。特に各ジャンルの中で時代感覚をとらえたユニークなミュージシャンを紹介するのは、常に新しいものにとびついてきた横浜精神ののっとなっている。

スタッフたちのほとんどが、かつて観客とし

- 一 はじめに
- 二 発生してきた問題点
- 三 行政主催のジャズ祭
- 四 今後の課題

てジャズ祭を楽しみ、「見る側よりつくる側へ」と集まった連中だ。

彼らは、学校や仕事の合い間をぬっては、全員無料奉仕で、企画からポスターのイメージづくり、ミュージシャンの出演交渉、当日の舞台づくりまでこなす。

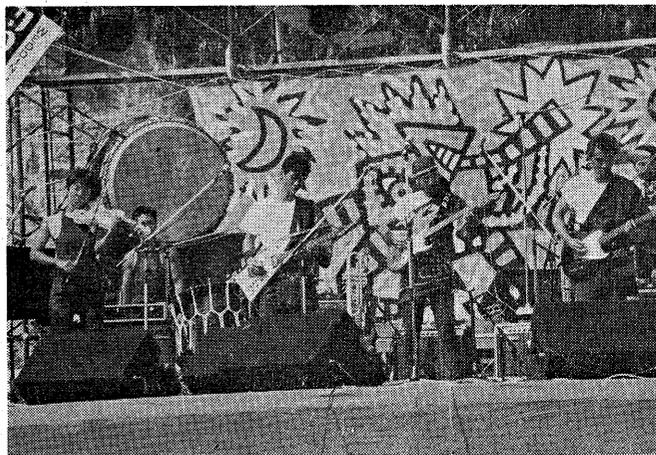
そして彼らは、それぞれにこのジャズ祭に生きがいを見つけている。

「お客さんの喜んでいる姿を見ているとうれしくなっちゃうの」という小学校の先生。

「昨年観にきたら、スタッフの人たちが生き生きしているので、自分もやってみたくなった」という高校生。

「仕事を離れて若い人たちと汗を流している

写真一1 第5回本牧ジャズ祭(谷 明道氏撮影)



と、日頃のストレスが消えていくんです」とテレビ笑いする会社員。

また、ある市職員は、

「大勢の人たちとひとつの目標に向かって作業することに充実感を感じますね」という。

商業主義のコンサートが多い中で、こうしたアマチュアたちが力を合わせて「手づくり」感覚でつくられる「本牧ジャズ祭」は、日本のジャズ発祥の地といわれ、さまざまな文化をい

はやく摂取してきたハマッ子魂が息づくコンサートとして、市民の間にも定着しつつあるようだ。

二——発生してきた問題点

しかし今、この「本牧ジャズ祭」に、いくつかの問題点が発生している。

たとえコンサートが大成功に終わっても、スタッフたちのジャズ祭づくりにかける意欲が次第に失われ始めているのだ。

コンサート終了後インタビューした数人の中心スタッフは、それぞれに

「できればやめたい」

「あきてきた」

「成功しても感動はなくなった」

という本音を語った。

それはなぜだろうか。

まず、運営していくには負担が大きすぎるといふ問題がある。

本牧ジャズ祭のスタッフは、名簿上では一〇人以上いるが、実際に下働きの作業を行っているのは、二〇人から三〇人ほど。全体の動きを把握し、運営をすすめていく中心的スタッフになると、その半分にも満たないのである。そんな人数で、約二、〇〇〇人を動員するコンサ

ートを行おうというのだから、ひとりあたりの負担は当然大きくなる。

彼らのプライベートの時間がすべてなくなるだけでなく、学校や仕事の時間まで犠牲にしなければならない。その上スタッフは、全員ボランティアのため交通費や連絡費、打ち合わせのための経費など、一切支給されないから、自腹を切るしかない。中には、毎回一〇万円以上の個人出費をするスタッフもいるという。ジャズ祭の収益金は、すべて次回のジャズ祭開催のための準備金にあてられ、彼らに還元されることはないのだ。

会場の問題も、スタッフたちの意欲をなくす原因のひとつになっている。

現在使っている「本牧市民球場」は、本来「少年野球振興のための施設」であり、それ以外の目的には使用できないことになっている。しかし、他に場所がないため、他の行政機関の助けをかり、毎回暫定措置として使用許可を受けている。すでに五回の実績をふまえても、いまだに安心して使える条件づくりができないのである。一部には、「行政の理解のなさ」を嘆くスタッフもいる。

さらに雨の問題がある。

野外コンサートは、雨に降られるだけで経済的に維持できなくなる危険性がある。本牧ジャ



ズ祭は、雨に対する根本的な対策を持たないできた。これまでジャズ祭が続いてこれたのは、たまたま雨に降られなかったからにすぎない。いくら過剰な労力をつぎこんでも、最終的にはこうした偶然性に左右される不安定感も、ジャズ祭づくりの意欲をなくす原因のひとつとなっている。

しかし、これらの問題点をふり返ると、そこに現在の本牧ジャズ祭自体の重要な問題点が読みとれる。

それは、スタッフたちが自分自身の問題と、ジャズ祭の問題とを分離してとらえている点だ。スタッフたちは、「自分がやりたい」というよりも、「やらねばならない」から、ジャズ祭

づくりを行っているように見える。

「本牧ジャズ祭」が回を重ね、市民のイベントとして定着してくるにつれ、スタッフたちは、すでにできあがった「ジャズ祭」のイメージに縛られはじめているのだ。

今のジャズ祭づくりが負担だというなら、なぜスタッフたちは身に合った規模や様式につくりかえないのだろうか。会場が借りられないというなら、なぜ市民や行政にそれらをアピールしないのだろうか。雨が心配なら、なぜ野外に固執するのだろうか。

そこには、ジャズ祭づくりに対するスタッフたちの問題意識の欠如を感じないわけにはいかない。

なぜこうなってしまったのだろうか。

これは実行委員会のあり方に問題がある。行政の名のもとに、ひとつの目的の下に集められるボランティア組織——。行政のもつ大義名分と参加者の目的性にはズレがあるのだ。

せっかくここまで育ってきた「本牧ジャズ祭」があるべき姿として継続して

くためにも、今、ここであらためてジャズ祭をふり返ってみる必要があるだろう。

三——行政主催のジャズ祭

本牧ジャズ祭は、一九八一年、中区の自主事業としてはじまった。自主事業とは、区民祭りや盆踊り大会など、各区が住民の交流と地域文化の活性化のために毎年行うもの。

この年、市から二〇〇万円の自主事業費を受けた中区は、ありきたりの事業を行うより「市民がやりたいことを市民の手でつくってもらおう」ことこそ地域文化の活性化に結びつく、テーマを探していた。

そんなとき、市内のジャズミュージシャンらが、横浜で日本初のフリージャズコンサートを行いたいと提唱してきた。彼らはハマのジャズの危機を感じ、「今こそ盛りあげるときだ」と意欲に燃えていたのである。ところがその一、二年前まで彼らの活動の拠点だった「横浜野外音楽堂」が横浜スタジアム建設のためにとり壊され、市内のホールやコンサート施設を借りようにも「観客のマナーが悪い」「音がうるさい」などの理由で使わせてもらえなかった。

さらにこの翌年には本牧米軍基地の全面返還が決まり、「ジャズ発祥の地」すら失われよう

としていたのだ。

今新しく生まれ変わりつつある横浜をイメージアップさせるためにも、横浜ゆかりのジャズを紹介していくことは意味がある、という彼らの主張は中区役所の上層部にも好意的に迎えられる、中区の自主事業としてジャズコンサートを行うことになったのである。

この頃横浜の街は、本牧米軍基地の全面返還を目前に、MM21計画、高速道路、ベイブリッジの建設など、二一世紀の街として生まれかわるための準備が着々とすすめられていた。中区の職員は、ジャズ祭を行うことで、この転換期に新たな市民意識を芽生えさせることが中区の使命だと考えていたのかも知れない。

中区の自主事業の主旨にそって、ジャズ喫茶やライブハウス、ミニコミ誌などを通じて、市民からジャズ祭の実行委員を募集した。

集まってきたのは二〇代後半から三〇代を中心にした音楽好き、お祭り好きたち約三〇人。いずれも「これがヨコハマ文化を盛り上げるきっかけになれば」と意欲十分だった。

このジャズ祭の運営で実行委員たちが担当するのは、出演者からポスターまで、コンサートのイメージをつくる「ソフト面」だけ。組織づくり、予算書、会場の交渉などの「ハード面」は中区役所が担当した。はじめから市民だけで

イベントをやるうとすれば一番困難といえる作業を、行政がその権限を行使して解決したのである。

これが大きな問題だったのだ。実行委員会では、企画内容の討議が行われたとき、「横浜初のフリージャズコンサート」は多数決で否決されてしまった。

実行委員たちは全員、このジャズ祭を毎年恒例行事にしたいという希望を持っており、そのためには約二、〇〇〇人からの観客を集めなければならぬ、と考えていた。しかし、フリージャズでは一部のジャズマニアしか動員できず、ジャズ祭は一回で終わってしまう、というのが反対理由であった。

そして逆に大人数を動員できるという理由で、ジャズやロック、フュージョンなどをとり入れ大衆性をもったコンサートが提案され、可決されたのである。

こうして当初、「フリージャズ祭」を提案し、ジャズ祭実施の推進力となったミュージシャンらは、実行委員会から去って行った。

たとえばはじめの目的が失われても、それが「市民の自主性」なら、と中区は許したのだった。面倒なことは中区役所がやってくれる。要するに実行委員たちは、やりたいことだけをやればよかった。

四——今後の課題

第一回ジャズ祭は大成功だった。

「ジャズ発祥の地」本牧でどうしても野外コンサートを開催したいという願いは、中区役所の口ききで本牧市民球場を借りることができた。

一番の懸念だった天候にも恵まれた。観客の入りも上々で、結果的に約八五万円の利益も出た。

会社を休んでまで話し合いや作業に参加して成功の喜びを味わった実行委員たちが、ジャズ祭を継続させていきたい、と思ったのは当然のことだ。

そして、自分たち——一般市民のできる範囲で組織や内容が練り直されることなく、形態や作業手順は第一回のとく同じまま継承された。

野外でやること。委員はボランティアで参加すること。収益金は次のジャズ祭の準備金として繰り越されること。

中区役所は実行委員たちの希望を喜んで容れ、第二回からのジャズ祭の運営をまかせ、第一回の収益金も実行委員会に託された。すべての実権が実行委員会に委ねられたこと

で、当然彼らは予算のやりくりや会場場所の確保、委員の役割の割り振りなども考えなくてはならなくなった。

一般のコンサートでは、出資者がその内容や運営方法など、全てにおいて絶対的権限をもつ。しかし二回目以降の本牧ジャズ祭の場合、誰のものでもないお金を資金としているため、責任の所在が明確でない。そこには常に、多数決原理で動く集団があるだけなのである。

この実行委員会は、誰もが自由に出入りでき、自由な発言権を持つといっても、ひとりの実行委員が自分自身のアイデアのために使うことは断固許されない。実行委員会の良識(民主主義)がそれを許さないのだ。

そして全員のお金は、なるべく全員に平等な形で使われなければ、という主旨から、前回のジャズ祭をくり返すしか方法がない。

そのため新しく参加してくるスタッフは、従来のジャズ祭をくり返すための労働力としてしか参加できないのである。

これらの問題点の原因は、実行委員会だけにあるのではない。中区の自主事業のとり組み方

にも、問題があったのだ。

中区は「市民がやりたいことを市民の手でつくってもらう」ことに意味を見出し、そこに生じてくる諸問題は、行政の力で解決していくという姿勢をとった。

中区は実行委員会を好きなことを行えばいい集団として位置づけたために、中区の目的と実行委員会の目的とが全く別のものになってしまったのだ。それ以上にまず、実行委員たちは、本牧ジャズ祭開催の目的を見失ってしまったのである。

中区が手を引いた二回目以降、横浜の地域文化活性化への意識は育(はぐ)くまれず、後に残った共通の思いは「野外の解放感」のみ。結局一回一回を前回と同じようにこなしていくだけという、自己完結的な方向へ活動が展開していったのである。

ジャズ祭をつくる意味は個人個人に分化し、決して共有されることはない。あるスタッフはストレス解消、あるスタッフは仲間づくり、あるスタッフは粋な遊び……。

このまま同じ方法でジャズ祭が運営されてい

くとしたら、スタッフたちはより苦しみ、無残な形でジャズ祭に終止符が打たれることが予想される。場所や天気心配、労力の負担……これらの問題点を解消するためにも、目的意識をはっきりもつことが必要なのだ。目的を尊重するためには、「苦しくても続けなければいけないんだ」という悲愴な使命感を持つ必要はないのだから。

彼らがボランティアでやる必要もないし、利益を得たからといって誰も文句をいう権利はない。どうしても野外コンサートにこだわりたいのなら、他にそれができる場所をつくらうと市民や行政にアピールすることも可能なのだ。一つの目的のもとに組織をまとめ、一つの行動を起こしていくこと……。

これからのジャズ祭には、「続ける」だけよりも「なぜジャズ祭を行うのか」という開催の意味を見出しそれをアピールしていくことが必要ではないだろうか。

△編集プロダクションDADDY代表V